

Title	安陽王と日南伝に就いて
Sub Title	On the materials related to An-doung-voung 安陽王, with special reference to Jih-nan-chuan 日南伝
Author	饒, 宗頤(Jao, Tsung-i) 陳, 荊和(Chen, Ching-Ho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.33(297)- 40(304)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安陽王と日南伝に就いて

饒宗頤
陳荆和 訳

近年中央研究院刊行の上古史に「吳越文化」及び「西南文化」の諸篇を執筆した際、安南古代伝説の問題にも触れざるを得なかつたが、史料の欠如により、仲々手強い感じを受けた。私見によれば、安南古代伝説の問題には深く考究すべき事項が二つあると思う。一つは「雒」王と「雄」王の異文であり、もう一つは雒を伐つた蜀王子の「蜀」という字に誤謬があるかないかと云うことである。前者については、フランスの F. Gaspardone 氏に「雒田と雄田」(Champs Lo et champs Hiong) なる論文があり、一九五五年の *Journal Asiatique* 誌上に発表されている。後者に関しては日本の藤原利一郎教授に「安陽王与西嘔」(東南亜研究、第三卷、p. 27-30, 1967) なる一文があり、蜀王の「蜀」は「嘔」の形譌であるらしく、当初或は「句」と書かれたのが訛つて「蜀」となり、従つて蜀王が駱を征したとあるのは実は西嘔が駱を討つたことの誤伝であろうと主張せられた。この説は頗る東南亜史専攻学者の賛同を得たが、筆者はひそかにこれを疑うものである。按ずるに安陽王の伝承は原来日南伝から出ているのであるが、一般の安南史研究家はこれに注意していない。今年の六月、香港で陳荆和氏とこの事に談及した際、氏は新説として頗る興味を抱き、発表するようにすすめられた。筆者は新加坡に帰つた後、先ず本篇を草して、陳氏の東渡するに托して発表することにした次第である。尚、雒王と雄王の問題は関連する所が広いので、将来、別に論ずることにした。

従来安陽王について論ずる者は僅かに比較的早い時期の二種の史料を利用して推論の根拠となしているのにすぎない。その一は水経注(卷三十七)葉榆河注引く所の交州外域記、一は史記索隱(卷一一三)南越尉佗列伝姚氏按語引く所の広州記である。

広州記はこれまで裴淵及び顧微の二本があるが安陽王に関する記載はいづれの本から出たのか、未だに抛り所がない。筆者が広雅叢書本単刊の史記索隱を検したところ、同書卷二十五南越列伝、西甌駱の下に次の如き所伝を注しているが、それは益州伝から引用したことになっている。

姚氏按益州伝云、交趾有駱田、仰潮水上下、人食其田、名為駱人、有駱王・駱侯、諸県自名為駱將、銅印青綬、即今之令長也、後蜀王子將兵討駱侯、自称為安陽王、治封溪県、後南越王尉他攻破安陽王、令二使典主交趾・九真二郡人、尋此駱即甌駱也。

今迄姚氏の按語が広州記を引くことのみが知られていたが、事實は益州伝にも見えて居り、別に出処のあることが知られていなかったわけである。次に交州外域記及び姚氏所引の益州伝について、略々考証を加えて見よう。

A、交州外域記

本書の作者は不明であるが、水経注には次の如く屢々引用されている。

温水注、九徳県、楊氏注疏、卷三十六、p. 52 下

葉榆河注、蠶冷県、同 上、卷三十七、p. 12 上

封溪県、同 上、同 上、p. 14 上

羸陵県、同 上、同 上、p. 17 下

九徳県、同 上、同 上、p. 18 上

太平御覽には交州に関する史籍を徴引しているが、交州外域記なる書名が見えない所を考えると、既に久しく亡佚したものとされる。張燮、東西洋考（卷一）形勝名蹟、維主宮の下に交州異域記を引き、又同書（卷十二）逸事考の引文には交趾外域記（惜陰軒叢書による）と作り、書名に稍々出入がある。即ち、一は「外域」を「異域」とし、一は「交州」を「交趾」となす。安南志略の越王城条にはこの史文を引いているが、伝本によつて又異つてゐる。内閣文庫本は交趾外域記となすが、その他の静嘉堂本及び大英博物館鈔本にも異文あり、陳荆和氏の安南志略校本は交州外域記と改めている。按ずるに、オールソー(L. Auroousseau)がその秦代初平南越考で安南志略の引用書に「交趾城記」があることを指摘したのはこの書のこと、「城」は「域」の誤りであり、別の史源があつたわけではない。但し、オールソーはこの交趾城記と交州外域記を別個の二書と見たが、勿論これは正しくない。

交州外域記は章宗源の隋書経籍志史部考証に録されているが、その撰年については、水経注九德県下に、「交州外域記曰交趾郡界有扶巖究」とあり、宋書州郡志武平郡条によると、吳建衡三年(271 A. D.)に扶巖夷を討つとあるので、交州外域記が扶巖に言及していることから見て、同書が書かれたのは吳の建衡年間(二六九—二七一)以後のこと、多分晋人の撰になるものと思われる。

B、姚氏按語所引の益州伝

史記索隱の中では各注家の説を引いているが、屢々「姚氏云」又は「姚氏按」等の語が見えている。例えば、

落下閔下に云く…「姚氏按益部耆旧伝…」（曆書）

公玉带动下に云く…「姚氏按…」（武帝紀）

一方、高帝紀鴻門の下に、「按姚察云…」、又孝文帝紀元元の下にも「按姚察云」とあるので、姚氏とは姚察を指すと思われる。オールソーは姚氏即ち交州記の作者たる姚文咸であるとすが、これは正しくない。隋書経籍志に姚察漢書訓解

三十巻の名が挙げられているので、史記索隱の按語はこの書から採つたものと思われる。姚察は梁、陳に仕えて隋朝に至り、大業二年（六〇六）に卒して居り、その事蹟は陳書本伝に詳しい。⁽²⁾

次に益州に関する著述は三国時代蜀の譙周に益州志があり（文選蜀都賦李善注引）、又梁、李膺の益州志（唐志は李充撰となす。姚振宗の隋志考証にくわしい）、任豫の益州志（説郛本、御覽地部石經がこれを引く）がある。⁽³⁾ この三書とも姚察以前の書であるが、所謂益州伝とはどれを指すのかよくわからない。又地理書にして「伝」と称するのは燕蓋泓撰の珠崖伝がその例である。

早期漢籍の中で安陽王に関する史料については、オールソーは黄恭交広記及び安南志略に見える交趾城記を挙げ、又交州外域記が最古の記録であると云っている。しかし管見によれば、その他に日南伝、太康地記、劉欣期交州記、沈懷遠南越志、劉昭統漢郡国志、李石統博物志の諸書にも見えている。これらの内、南越志はよく知られて居り、Gaspardone氏も曾つてこれに就て論じたが、其他の書は注意する人が少ない。就中、日南伝は最も重要であるので、次にこれらの書について補述したい。

一、日南伝

太平御覽（卷三四八）兵部、弩条に日南伝を引いて云く、

南越王尉佗攻安陽王、安陽王有神人罽通、為安陽王治神弩一張、一發万人死、三發殺三万人。他（佗）退遣太子始降安陽。安陽不知通神人、遇無道理、通去。始有姿容端美、安陽王女眉珠悦其貌而通之。始与珠入庫盜鋸截神弩、亡歸報佗。佗出其非意、安陽王弩折兵挫、浮海奔竄。

陳禹謨刊本の北堂書鈔（卷一二五）神弩もこの条を引いて居り、隋書經籍志、兩唐書（經籍志、芸文志）にも撰者未詳の日南伝一卷が見えて居り、⁽⁴⁾ いずれも同一書を指すものである。

御覽では次の如く、更に二ヶ所日南伝を引いている。

卷十一、天部霽は「扶南日南伝」を引いて云く、

金陳国入四月便雨、六月乃止、少有晴日、六月不雨、常晴、歳々如此。

卷八九〇、象部では万震「南洲日南伝」を引いて云く、

扶南王善射獵、每乘象三百頭、從者四、五千人。

上述の二書を見るに、一は日南伝の上に「扶南」の二字を冠し、一は「南洲」の二字を加えて、撰者は万震となす。万震は呉人にして南洲異物志の著がある。清末の陳運溶及び日本の小川博氏ともに南洲異物志の輯本がある。⁽⁵⁾南洲日南伝は南洲異物志の誤であるか、はたまた日南伝は独立の一篇であるかは知られていない。作者が若し万震であるならば、それは呉時の書であるが、現存の史料には限りあり、断定しがたい。たゞ呉は扶南に使節を出し、使者の康泰、朱膺共に著述があり、日南伝に安陽王の事を載せるのは必ずやその記事が呉時に中国に伝聞されたもので、安陽王に関する最も初期の史料と目することが出来る。

二、晋太康地記

水経注（卷三十七）葉榆河注に交州外域記を引いたのち（引文略）、続けて云く、

安陽王有神人、名臯通、下輔佐安陽王、治神弩一張、一發殺之百人、南越王知不可戰、卻住武寧県。按晋太康記、県属交阯。越遣太子名始降服安陽王、称臣事之。安陽王不知通神人、遇之無道、通便去語王曰、能持此弩王天下、不能持此弩者亡天下。通去、安陽王有女曰眉珠、見始端正、珠与始交通、始問珠令取父弩視之、始見弩便盜以鋸截弩訖、便逃歸報越王。南越進兵攻之、安陽王發弩、弩折遂敗。安陽王下船逕出于海、今平道県後王宮城、見有故処。晋太康地記、県属交阯。

安陽王と日南伝に就いて

上引文で越王子始と眉珠の故事は日南伝と全く同じである。東西洋考(卷十二)の逸事考は水経注を引いて、「蜀王子將兵三万討雒王、服諸雒將、因称安陽王、後南越王尉佗攻之」と記し、「安陽王下船徑出海」の句に至つて、晋太康地記に出ずと称していない。

上引文の前後二ヶ所に、「晋太康地記、県属交趾」なる語が見えているが、王先謙合校本の水経注は全氏(祖望)の按語を引いて、「九字、注中注」と述べ、これが水経注の夾注であると見ている。一方、畢沅経訓堂叢書、晋太康三年地記輯本は僅かに「平道県属交趾郡」の一句を収めているのみであるので、水経注この段の文字は果して太康地記から出たのかどうかはつきりせず、清代の学者も輯録を加えていないので、姑く太康地記より出たものと見なしたい。按ずるに、太康三年(二八二)は晋が呉を亡した年の二年後に当り、この時に日南は初めて呉の版図に入つたのであるから、安陽王の事を地書に収録することも自ら有得たことである。

三、晋劉欣期交州記

北堂書鈔(卷一二五)神弩条に劉欣期交州記を引いて云く、

安陽王者、其城在乎(平)道県之東北。林賀周相舉通徐作神弩。趙曲者、南越王之孫、屢戰不克、矯託行人、因得安陽王女媚珠通、截弦而兵、既重交、一戰而霸也。

孔広陶校注に云く、

水経注葉榆河注引劉交州記、其城十三字作有神人名四字、舉作梟、徐作治、無趙曲以下、

とあり、陳本は日南伝を引くとなし、内容は同じなれども文面は異つている。劉欣期交州記には曾劔輯本があり、嶺南遺書に収められているが、上引の文は見えないので、その欠を補ふことが出来よう。又劉欣期の書中で李遜が朱崖を征したことが見えているので、その交州記が書かれた年代は東晋の太元(三七六―三九六)以後とならう(曾劔の跋文に詳し

5)。

四、梁劉昭統漢郡国志注

統漢郡国志注に云く、

交阯郡、武帝置、即安陽王国、雒陽南一万一千里。

安南志原城郭故址はこの条を引いて云く、

越王城（中略）、又名可縷城、古安陽王所築也（中略）、故址猶存。劉昭云、交阯即安陽王国是也。

五、宋李石統博物志

古今逸史本統博物志（卷五）に云く、

交州安陽王有神人名臯通、為安陽王治弩一張、一発殺三百人。

この条は古今圖書集成辺裔典（卷九十五上）にも引かれている。李石統博物志は或は晋人、或は唐人とも題するが、実は宋代方舟先生の著である（余嘉錫、四庫提要弁証小説家類参考）。しかしこの条は明らかに日南伝から採つたもので、晩出の史料であり、余り価値はない。

以上の考察により、安陽王の事は原来日南伝に見えていたことがわかり、各書の記載も明確で、安陽王は問題なく実在の人物である。上述せる如く、姚氏（察）の按語は広州記より採つたのみならず、且つ益州伝を引いている。安陽王が蜀の王子であるが故に、益州伝がその事蹟を記載するのは極く自然な事で、蜀王の「蜀」字に誤のある筈はない。

太史公（司馬遷）の南越伝贊に、

尉佗之王、本由任囂、遭漢初定、列為諸侯、隆慮離涇疫、佗得以益驕、甌駱相攻、南越動搖、漢兵臨境、嬰齊入朝、

安陽王と日南伝に就いて

と見えているが、この条は韻語で、「甌駱相攻」なる句は実は趙佗以後の事で、閩越王郢が兵を興して南越の辺邑を撃つたことを指す。故に南越王胡はたゞ俛首あるのみで、太子嬰齊に命じて長安に赴き、宿衛に入らしめたのである。

藤原氏は「蜀王」がもとは「句王」で、「句」即ち「區」と疑われているが、各書を按ずるに、安陽王を「西句王」とよんだ例はない。又別に異本があつて傍証に資するわけではなく、且つ史記伝贊の本文も解釈が難しいので、藤原氏の説は成立たないと思われる。

一九六九年七月、新加坡大学にて。

註

(1) 許雲樵主編東南亞研究、(第三卷、一九六七年、新加坡)の「編校餘瀋」参照。

(2) オールソーは姚氏を姚文咸と見なしたが、これは誤りである。岑仲勉が既にその誤りを指摘している。詳細は岑氏の中外

史地考証、p.56 参照。

(3) 益州に関する著述は何守度益州談資(学海類編本)を参考せられたい。

(4) 旧唐書経籍志地理類、沈懷遠南越志の下に日南伝一卷が見

(訳者附記) 本論考の原文は「安陽王与日南伝」と題して、中文で書かれ、本年(一九六九)八月、訳者が渡日する際に托されて、日本の学界で発表することを依頼されたのであるが、三田史学会の御厚意により「史学」の本号にその全文の邦訳を掲載させていたゞくこととなつた。饒宗頤教授は永年香港大学中文系の講師、高級講師を歴任し、現在は新加坡大学中文系主任教授の職にあり、中国書誌学に対する造詣の深いことで学界に知られている。訳者は藤原氏の論文をも拝読し、且つ饒氏の論文をも訳して、両氏と異なる意見も存するので、近く別の機会に愚見を開陳して、藤原・饒両教授並びに諸賢の御教示を仰ぎたい所存である。陳荆和誌。一九六九年十一月、三田第三研究室にて。

えて居り、又新唐書芸文志地理類、釈法盛歴国伝の下、林邑国記の上に日南伝一卷が見えている。

(5) 陳運溶の輯本は麓山精舍叢書第二集、古海国遺書鈔、宣統三年(一九一一)刊に見えて居り、小川博氏の輯本は安田学園研究紀要、第二、三号に載つている。

(6) 史記南越伝に「高后遣將軍隆慮侯竈往擊之」とあり、索隱(卷二十五)は隆慮侯竈に注して、「韋昭云、姓周、隆慮侯名、屬河内、音林閩二音」と述べている。